

# 「考え実現する力」育む授業づくり

「考え実現する力」で未来を舵取りできる生徒の育成」に取り組み埼玉大学教育学部附属中学校（内田裕子校長、生徒442人）。その力を育む上で着目したのは思考の働きだ。一つは、直感的に判断してすぐ行動に移す「速い思考」。もう一つは、一度立ち止まって目的や意味を深く考え行動につなげる「遅い思考」だ。国語科では、二つの思考の往還を促すためにループリックを活用。情報活用能力を育み、生徒たちの新たな思考や行動選択にもつなげている。その具体的な取り組みとは。

## 「考え実現する力」を育む授業づくり

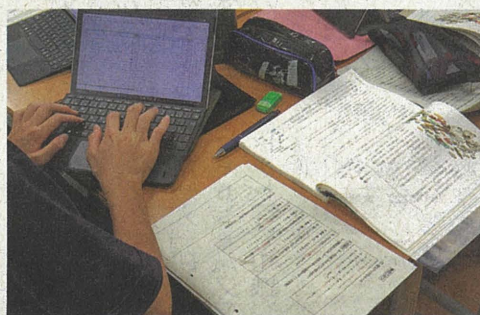
に授業つくり力を入れる同校。「考え実現する力」に関して、国語科では「言葉による見方・考え方を働かせながら『知識及び技能』と『思考力・判断力・表現力等』の資質・能力を往還し、自らの考えを形成し、社会の中で適切に伝えていく力」として捉えた。この力を育むことで多様な他者と関わり、自らの未来を主体的に舵取りすることにつながるためだ。

## 「速い思考」と「遅い思考」の往還

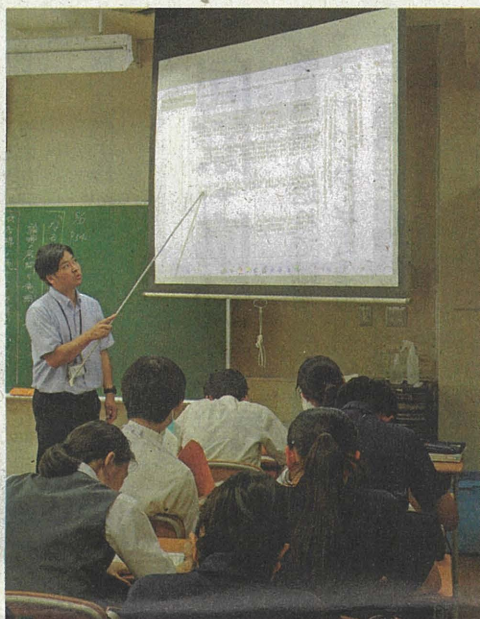
手だては二つある。一つは「思考の往還を生む自己評価・自己調整の工夫」。思考の往還（「速い思考」と「遅い思考」）には、必要に応じて立ち止まり、考え直して他者に誤解なく分かりやすく伝えることが欠かせない。情報を受け取るだけでは不十分なためだ。直感的に考えた内容（「速い思考」）を見直す際、その判断基準としたのがループ

## 自己評価・調整にループリック活用 複数情報を比較・検討し考えを更新

リック。評価基準として用いるのではなく、自己評価・自己調整に役立てるという位置付けた。二つの思考の往還を促す役割もある。もう一つは「思考の往還を支える情報の収集・整理・比較・発信の工夫」。



教材文の魅力伝えるための「問い」を作り、それをエクセルシートにまとめた



「遅い思考」に関して、国語科は「本文や他者の考え、自らの経験などの情報を基に考え直し、再構成する過程」と考えた。「情報の扱い方に関する事項」を関連付け、収集・整理・比較・発信の過程を学習活動にも位置付けた。根拠となる叙述や具体例を集め、複数の情報を比較・検討しながら、生徒たちが自ら考えを形成・更新できるようにしている。

## 1年 オノマトペへの効果と根拠考察 2年 教材の魅力伝える「問い」作り 3年 論理展開工夫し小論文を書く

### 国語公開授業

同校の令和8年度研究発表会（中学校教育研究協議会）が5月26、27の両日に行われ、国語科は三つの授業（各学年）を公開した。1学年の授業を担当したのは大谷颯教諭。教材文中

にあるオノマトペ（音や様）があった。2学年の授業は成田和基子・状態を表現した擬音語や擬態語などを扱い、その教諭が担当。読み手に向けて教材文の魅力を伝えるための「問い」を作り、叙述を深める取り組みだ。学校図書と連携し、教科等横断的な実践（美術科）でもめる実践だ。1・2学年の

小論文の作成に向け、参考にしたいループリック（身に付けた力）を提示した大塚教諭

両授業ともループリックを活用し、生徒たちが自らの学習状況を把握しながら調整できる工夫も凝らした。そして3学年の授業を担当したのは、国語科主任の大塚悠希教諭だ。生徒が自らの考えを読み手に納得してもらえよう、「論理の展開」（「結論」「根拠」「理由付け」など）を工夫し、小論文を書くという取り組み。参観者から注目を集めた授業の一つだ。

「結論・根拠は何か」「根拠と主張をどのようにつなげるか」「感情的な言葉ばかりではないか」…こうした記述・確認項目を考え、整理したものを「構成メモ」と呼び、生徒一人一人が作成。その際、身に付けるべき力をループリックで提示した大塚教諭。学びの方向性を示すことで、生徒が自らステップアップを図れるようにするための。話し合いを通じ、「構成メモ」に修正を加える場面も。小論文のテーマは「レジはセルフレジを広めていくべきか？」。修正した「構成メモ」を基に、生徒たちは小論文を書き上げた。

評価の対象に加え、自己調整力伸ばすアンケート調査を実施し、今後の課題も明らかにした。一つは、生徒が次の行動につなげていく自己調整だ。今後は思考の過程や自己調整する姿も評価の対象に入れ、教師の評価と生徒の自己評価が相互に働く授業づくりを目指すという。